

第七講 言説と歴史学

【レポート課題】 歴史は実体なのか、それとも表象なのか？

言語論的転回と歴史学

言語論的転回と歴史学の近似性

史料批判という方法において歴史学は言語論的転回が主張する方法と近似している←一次史料と二次史料の区分・テキストの真贋の区分
テキストを通じてテキスト自身を時代や社会の中に位置づけて解釈していくという方法も近似している

歴史学と言語論的転回との相違点

歴史家はテキストの中に事実を確定し、それに基づいて歴史を構築しようとする→テキスト事態を否定することはできない
多くの歴史家が事実と認めているから事実とするというのは一種の共同幻想論である。→ローマ帝国とキリスト教の問題

歴史学の伝統的方法論に吸収可能

テキストの相対的証言能力の限界性を認識：基準として同時代性・当事者・公文書（個人的な偏見や誤謬の排除）
解釈という工程：事実の認定・事実の否定・事実の評価・時系列の中への位置づけ
事実の否定という作業の中にテキストにおける捏造・創作・誤謬・錯覚を前提とする。そして何故そのような偽の事実が挿入されたのかを説明するという作業が伝統的な歴史学の手法にはある。

(例)

前 449 年のカリアスの平和

同時代の歴史家（ヘロドトス・トゥキュディデス・クセノフォン）によっては言及されず。

前 4 世紀の弁論家たちによって初めて言及される。

一つの言説の存在：アテナイの支配は良かったが、スパルタの支配は

ギリシア人を裏切っている（前 386 年の大王の平和を批判）

骨子はペルシアをアテナイはエーゲ海から排除した。

スパルタはエーゲ海におけるペルシアの支配を手助けした。

アテナイの海上支配を再建すべし。

歴史家の多くは事実として認定

←碑文情報：アテナイ貢税表における乱れ

←ペルシアの活動に変化：活動の低下

カリアスの平和の存在を否定

←碑文情報：貢税表における乱れはない←問題の会計年度の碑文は石碑の前面下部から背面上部に記されている

←ペルシアの活動に変化なし←サモスの反乱・レスボスの反乱にペルシアの介在・アテナイ側からの抗議なし

参考文献

石田一良『文化史学の理論と方法』同志社大学出版部、1951年。

E・H・カー（清水幾太郎訳）『歴史とは何か』岩波新書、1962年。

ジョージ・P・グーチ（林健太郎・孝子訳）『19世紀の歴史と歴史家たち』（上・下）筑摩書房、1971・74年。

フェルディナン・ド・ソシュール（小林英夫訳）『一般言語学講義』岩波書店、1971年。

ピーター・バーク（長谷川貴彦訳）『文化史学とは何か』法政大学出版局、2010年。

ヘロドトス（松平千秋訳）『歴史』岩波文庫、2007年。

L・v・ランケ（山中謙二訳）『ローマ的・ゲルマン的諸民族史』千代田書房、1948年。